

仕事と私生活の境界は無くなり、仕事だけの生活

2008年に破綻したリーマンブラザーズの元最高財務責任者(CFO)であったエリン・キャランさんが5年を経て、自分のキャリアを振り返り、この3月9日にNYTimesに「Is There Life After Work?」と題して寄稿している。誰もがうらやむエグゼクティブポジションに登りつめた女性が仕事中心のキャリア人生を率直に反省し、仕事と私生活とのバランスが取れた人生を生きることの大切さを語っている。(以下 NYTimesから引用。訳は野尻)

「退職する3年前に社内パーティの席で、同僚が当時の夫に『彼女は週末何しているの？カヤック、ロッククライミング、ハーフマラソンなどをしているの？』と尋ねた。『いいえ、彼女は寝ているよ。』これが夫の回答であった。それは事実であった。週末に仕事の続きをしない時は次週に備え充電していた。そう、家庭、友人、結婚生活よりも、私は仕事を常に優先していた。そして3年後、私は会社の破綻の数ヶ月前に退職する。以来、自分が過ごしてきた『仕事と仕事以外の生活』のバランス(その偏り)について時間をかけ、振り返ってきた。「最初から仕事にすべてを捧げるということではなかった。徐々にそうなっていく。仕事中心の生活に少し変化し、それが常態となる。その繰り返しであった。最初、日曜日に家で半時間だけE-mailの処理をしたり、to-doリストの作成をしたり、スケジュールの段取りをした。そしていつの間にか数時間、仕事をするようになり、ついには日曜日の丸一日を仕事に費やすことになっていた。そして仕事と私生活の境界は無くなり、仕事だけの生活になってしまった。」「当然のことながら、仕事を辞めたとき、私は心身ともに憔悴しきっていた。何かに取り組んだり、気分転換をすることすら出来なかった。自分と仕事との見境が分からなくなっていた。仕事が私となってしまっていた。」

このようなことは誰にも繰り返して欲しくない

「あれから数年が経ち、今はまったく別の人生を送っている。新しい夫であるアンソニーそして私が愛し、世話をする人々に、自分のエネルギーを向けている。しかし、失った時間の穴埋めをすることは出来ない。もっとも大切なことなのだが、いま継子はいるが、自分の子供を産む機会を失ってしまった。もう47歳である。数年に亘り、夫と私は対外受精を試みている。」「時々、若い女性達が、私の業績を称えてくれる。たしかに、20年間必死で働き、そしてこれから20年を別のことに打ち込める。しかしこれはバランスなんかじゃない。このようなことは誰にも繰り返して欲しくない。キャリアの絶頂にあった時でさえ、仕事と生活の適正なバランスを成し遂げていたと思ったことは一度も無かった。」

あそこまで極端に尽くすことはなかった

「もし、私が過ごしてきた仕事中心の生き方を選んでいなかったら、CFOになれなかっただろうかと自問することが度々ある。つい最近まで、唯一仕事のみで打ち込んだことがキャリアで成功してきた一番の要因であると考えていた。しかし、いま、私は控えめにしか自分を主張してこなかったことに気づき始めている。自分は才能に恵まれ、知識があり、エネルギーがあふれていた。あそこまで極端に尽くすことはなかったのだ。そこまで尽くしたからといって、その見返りが比例してふえるわけではなかった。」「毎日、起床して就寝するまでずっとブラックベリーを見続ける必要はなかったのだ。ほとんどの食事を職場のデスク上で食べるということも必要がなかったのだ。自分の誕生日にヨーロッパでの会議に出るために深夜に飛行機に乗る必要もなかったのだ。自分の私生活をもう少し大切にしながら、もっと調和の取れた形で自分の役割を全うすることが出来たはずだと今は思っている。」

自分自身の人生を生きることが大切

「リーマンブラザーズが破綻しなければ、自分はどうなっていただろうと思うことがある。2007年に自分の生き方に疑問を持つようになった。すなわち、自分自身の人生を生きていないこと。しかし当時はキャリアから抜け出せることは出来ないと感じていた。CFOの役割を続けて欲しいと頼まれていた。もし、金融危機が無ければ、仕事を辞する勇気は無かったかもしれない。自分の人生に感謝の気持ちをもてる所に到着するには、多分、私には人生における最悪の経験と思えるようなことが必要であった。いま目の前にあることに感謝することを学ぶ必要があった。結局のところ、これが私からの最善のアドバイスだ。キャリアマネジメントに関しては貴重なアドバイスを与えることが出来るとしても、人生の生き方については私が丁度いま、学んでいる真最中である。」

編集後記

際限なく深残業の毎日を繰り返し、疲労困憊の人が私の周辺でも非常に多くいます。エリン・キャランさんの率直な告白は参考になります。「そこまで尽くしたからといって、その見返りが比例して増えるわけではない」と彼女は告白しています。イーライリリーに在職中、私も多忙な毎日でしたが、上司であるアメリカ人の本部長が「私は11時間働く、ケンジも11時間働いてくれ、それ以上働く必要は無い。」と言われたことを覚えています。現実的に即してこのように上限を決め、ルール化すること、特に上司からこのような提案をすることは、上司の真意を忖度するしかない部下にとり、明快です。

野尻